

B-11					
主題	普通のご飯が食べたいと望む利用者の思いを支援するための多職種連携				
副題	嚥下力と本人の思いとの違いをどう支援していくか				
キーワード 1	多職種連携	キーワード 2	食事	研究(実践)期間	6ヶ月

法人名・事業所名	社福) 白十字会 特別養護老人ホーム白十字ホーム				
発表者(職種)	八戸佑望(介護職員)				
共同研究(実践)者	なし				

電話	042-392-1375	FAX	042-392-1255		
----	--------------	-----	--------------	--	--

事業所紹介	白十字ホームは 1967 年に東京都内で 10 番目の特別養護老人ホームとして開設され、「トトロの森」のモデルとなった八国山の麓に建つ定員 170 人の従来型の施設です。併設の白十字病院、老人保健施設等と連携し、利用者の方が「安心、生き生き、こころ豊か」に生活できるような支援を目指しています。				
-------	---	--	--	--	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

白十字ホームは、16 年前に嚥下検討委員会を立ち上げて取り組んでいるが、その中で嚥下評価を行うと濃厚食になってしまうことが多くある。嚥下機能と利用者の生活・文化との違いに迷いが生じているケースがある。

K さん 79 歳女性。キーパーソンは娘さんで「お母さんには長生きをしてほしい」と協力的で面会にもよく来て下さっている。入所時の嚥下評価で濃厚食が望ましいといわれるも「濃厚食は美味しくないから嫌い」と意志が強く、濃厚食に全く手を付けない。柔らかいものを小付けで提供するも、好き嫌いがはっきりしていて食事摂取量にむらが見られ、体重減少も見られた。

K さんの「普通のご飯が食べたい」という強い思いを叶えるためには、多職種で連携を進め支援する必要があった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

目的：K さんの「普通のご飯が食べたい」という意思を尊重し、K さんらしい生活を実現させるために、多職種で協力し意見を出し合い、「食事が美味しく食べられるよう」統一した支援を行う。

仮説：本人の望む「普通のご飯が食べられる」ようになれば、生活がより充実したものになり、生活の質の向上にもつながると考える。また介護職員間で利用者支援の在り方を見直すきっかけとなるばかりか、専門職との連携など他利用者支援にもつながると考える。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ① K さんの施設入所前の状態や既往歴、日々の様子を把握する。K さんにご家族に普通の食事をすることで起こりうる誤嚥や窒息のリスクを相談員、管理栄養士、看護師、介護職員それぞれから話をして了解を得た上で常食の提供を始める。
- ② 常食を提供するにあたってどの食事なら安心して提供できるのか。介護職員間で共有するために

食事提供表を作成し、Kさんの好き嫌いも把握する。

- ③ 看護師や管理栄養士にKさんの体重やBMI等の健康面でどのような変化が見られているのか聞く。
- ④ 車椅子上での姿勢をリハビリ職員に見てもらい、Kさん自身にもどの姿勢が楽か知る。
- ⑤ 食事提供表を元にKさんの食事状況を言語聴覚士に説明。より安心、安全に食事をするためのアドバイスを受け、フロア介護職員間で統一した提供方法を決めた。(刻み方やとろみの付け方など)
- ⑥ 常食提供後の変化を他の介護職員やKさん本人に聞き取り調査を行い、より良い支援方法を検討する。その中で、Kさん本人も一番望んでいた米飯を看護師も勤務している昼食時に提供をすることになった。

《4. 取り組みの結果》

- ・取り組み以前は濃厚と粥だったが、今現在は常食と粥(昼のみ柔らかいご飯)に変更。
- ・Kさんが3食ちゃんと食事を召し上がってくれるようになり、Kさん本人も「食事が美味しい」と話すようになった。表情も明るくなり、食事がKさんにとって楽しみなものに変わった。
- ・自分自身の専門職としてのスキルが以前よりも上がり、先輩職員や看護師などに自分の意見をしっかり伝えられるようになった。また、中堅職員として多くの専門職種と積極的に関わるようになり、利用者とそれぞれの専門職がどのように関わっているのか観察し理解するようになった。
- ・フロア介護職員のKさんへの関わりに変化があった。以前よりもKさんと会話をするようになっている。
- ・利用者の支援も自分だけで考えるのではなく、多くの専門職やフロア介護職員と意見を出し合ってより良い支援へとつながるようになった。

《5. 考察、まとめ》

利用者の思いを尊重して支援していくことは簡単ではないが、多くの専門職や介護職員と意見を出し合ってどうしたら利用者にとって一番良い支援をできるのか模索していくことは大切である。ひとつひとつ問題や課題を解決していくことで、利用者の生活の楽しみや生きがい、意欲などへの第一歩につながると感じた。

中堅職員として以前はあまり積極的に多職種やフロア職員と関わる事ができていなかったが、他の職員や専門職の意見を聞くことで自分自身の専門職としてもスキルアップへつながり、自分では気づけない部分や悩んでいた部分を解決する事ができる場面が増えた。その結果利用者に対する支援の視野も広がった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

山下久之 高齢者施設がもたらす利用者の生活課題の隠蔽機能

—多職種連携の欠如から生じる—「意図せざる結果」p28.29

《8. 提案と発信》

利用者がホームで楽しく充実した生活を送るためにも利用者1人1人と関わり、多職種で日々の利用者の様子を報告、連絡、相談していくことはとても重要なことである。利用者の思いと向き合い、寄り添って少しずつ改善していくことでホームの理念でもある「安心、生き生き、こころ豊か」に生活できるような支援へとつながっていくと思う。